W-4-1

東京方言の呼びかけイントネーション*

Vocative intonation in Tokyo Japanese

溝口愛（ニューヨーク市立大学、国立国語研究所）
amizoguchi@gradcenter.cuny.edu

１．はじめに

本発表では、東京方言における呼びかけイントネーションについて分析を行う。呼びかけ時のイントネーションについては、鹿児島方言の調査結果が報告されているのみで（Kubozono 2018)、その他の方言についての調査報告は行われていない。本発表は、日本語における呼びかけイントネーションの体系的な調査の一部として、東京方言を扱い、記述的研究からそのパターンを明らかにする。特に、呼びかけにいくつのイントネーション型があるか、名詞の語彙的なアクセント型がどのように変容するか、アクセント型の中和現象が起こるか、疑問イントネーションとどのように区別されるか、を調査する。

２．イントネーション型の特定

研究の端緒として、NHK 連続テレビ小説「半分、青い。」（2018 年 4 月～9 月放送）で、登場人物が使用した呼びかけ文に着目し、聴覚印象にて、呼びかけイントネーション型を特定することとした。その結果、呼びかけイントネーションは大きく分けて以下の３つに分類されることが推察された。１）平叙文アクセントの強調形（α型）、２） 最終音節の高ピッチ形（β型）、３） 最終音節のピッチ下降形（γ型）。NHK「半分、青い。」公式ホームページ内あらすじにて公開されている動画の中で確認できたものから、それぞれの型を（２）に例示する。以下、［ はピッチの上昇地点を、］は下降地点を表す。また、文の種類を区別するために、次の記号（。！ ？）を用いる。

（１） a. 平叙文（一語文）　スズメ。
　　 b. 呼びかけ文　スズメ！
　　 c. 疑問文　スズメ？

（２）イントネーション型の例

イントネーション型	平叙文	呼びかけ文	場面
α型	ス[ズメ。	ス[ズメ！	説教をする
	ス[ズメチャン。	ス[ズメチャン！	謝罪、部屋に入ってきて話しかける
β型	ス[ズメサン。	ス[ズメ[サン！	扉越しに呼びかける、寝ている人を起こす
	ス[ズメチャン。	ス[ズメ[チャン！	久しぶりに会った
γ型	ス[ズメ。	ス[ズメ]ー！	良いニュースを伝える
	[リ]ツ。	[リ[ー]ツ[ー]ー！	部屋の外から呼びかける

* 本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果を報告したものである。

３．聞き取り調査

２で特定した型の東京方言での実際の使用状況について、聞き取り調査を行った。特に、それぞれの型の出現頻度と場面ごとの使い分けを明らかにするために、９つの場面を想定し、場面にふさわしい呼びかけをしてもらった。また､語彙とイントネーション型の関連を見るため、モーラ数、音節構造、アクセント型の異なる語彙リストを作成し、場面ごとに読み上げてもらった。

３．１　調査参加者

東京方言話者２名（７０代女性、３０代男性)。紙面に印刷された語彙リストを順番に読み上げてもらった。

３．２　調査語

２モーラから５モーラの語、２０語を使用した。２モーラおよび３モーラの語については、アクセントの有無、音節構造を考慮しリストを作成した。読み上げ時の語の順番はランダム化された。

（３）語彙情報

#	モーラ数	音節構造	語彙	アクセント
1	2	重	優（ゆう）	あり
2	2	重	健（けん）	あり
3	2	軽軽	由美（ゆみ）	あり
4	2	軽軽	ママ	あり
5	2	軽軽	君（きみ）	なし
6	2	軽軽	多田（ただ）	なし
7	3	重軽	悠真（ゆうま）	あり
8	3	重軽	健也（けんや）	あり
9	3	軽重	太郎（たろう）	あり
10	3	軽重	花音（かのん）	あり
11	3	重軽(軽軽軽)	直也（なおや）	あり
12	3	軽軽軽	麻里奈（まりな）	あり
13	3	重軽	京田（きょうだ）	なし
14	3	重軽	千賀（せんが）	なし
15	3	軽重	伊能（いのう）	なし
16	3	重軽(軽軽軽)	直美（なおみ）	なし
17	3	軽軽軽	春美（はるみ）	なし
18	4	重重	先生（せんせい）	あり
19	4	軽軽重	おばちゃん	なし
20	5	軽重重	おばあちゃん	あり

３．３　呼びかけの場面

呼びかけの場面は、１．注意を引く（電話などを取り次ぐ際）、２．責める、３．（隣の部屋などにいるか）存在確認、４．葬式、５．遠くにいる、６．目の前にいる、７．久しぶりに会った、８.心配している、９.お願いをする、の９つを想定してもらい、場面にふさわしい呼びかけをしてもらった。また、各語の読み上げの始めに平叙文、終わりに疑問文を発話してもらった。

３．４　ピッチ（F0）分析

録音した発話のピッチ（F0）曲線を音響分析ソフト Praat（Boersma & Weenink 2018）で表示し、各モーラに高ピッチ、低ピッチのラベルを付与した。ラベルをもとに、場面ごと語ごとのイントネーション型を決定した。

４．結果

４．１　イントネーション型

聞き取り調査においても、呼びかけイントネーションは、（α）平叙文アクセントの強調形、（β）最終音節の高ピッチ形、（γ）最終音節のピッチ下降形の３つの型に分類された。起伏型、平板型それぞれの呼びかけイントネーション型の例を（４）に示す。

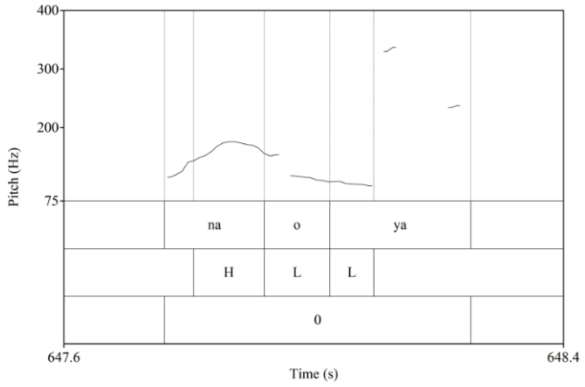
（４）呼びかけイントネーション型の例

	平叙文	α型	β型	γ型
起伏型	[ナ]オヤ。	[ナ]オヤ！	[ナ]オ[ヤ！	[ナ]オ[ヤ]！
平板型	ナ[オミ。	ナ[オミ！	ナ[オ[ミ！	ナ[オミ]！

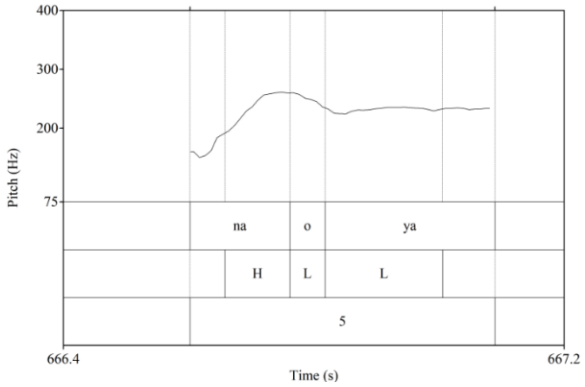
（４）で示した例のピッチ曲線を（５）に示す。

（５）イントネーション型ピッチ曲線例　起伏型　ナオヤ

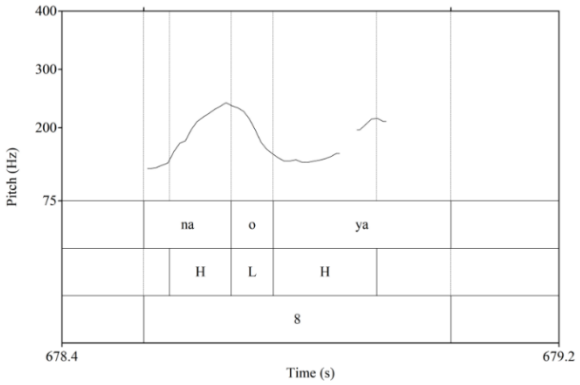
平叙文



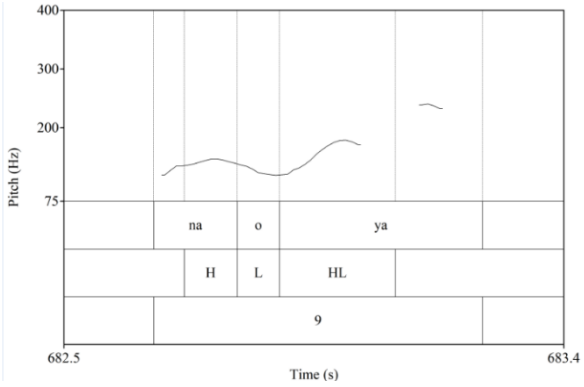
α型



β 型

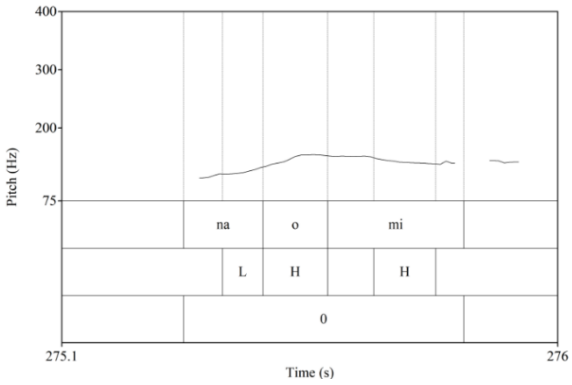


γ 型

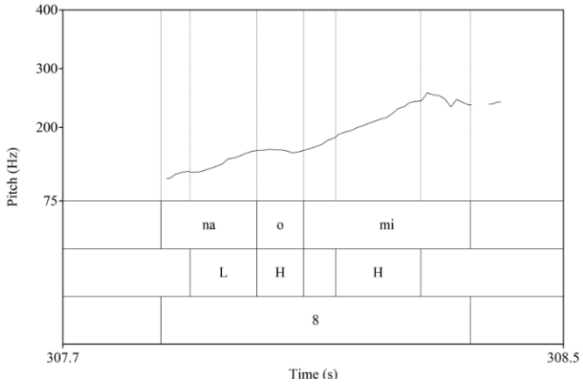


（６）イントネーション型ピッチ曲線例 平板型　ナオミ

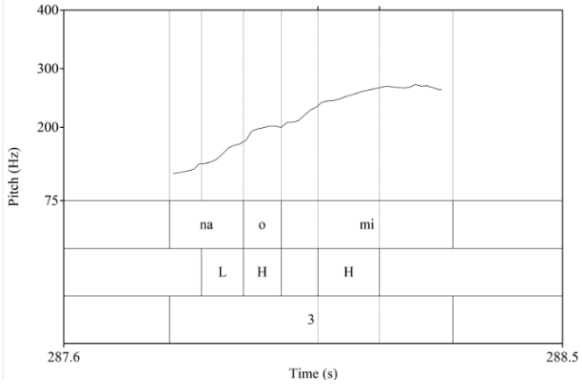
平叙文



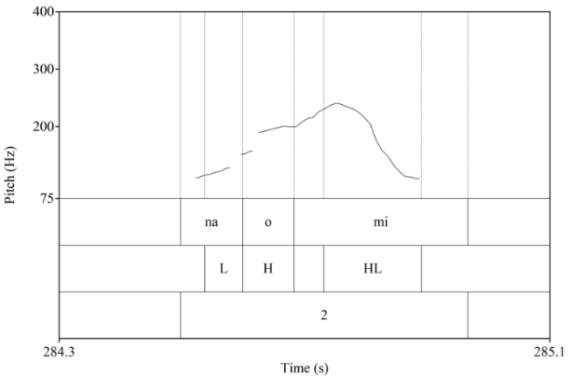
α 型



β 型



γ 型



４．２　場面ごとのイントネーション型

３つのイントネーション型は場面ごとに使い分けがなされている。場面ごとに使用されたイントネーション型の出現回数を（２）に示す。

場面を通じて出現回数がもっとも多かったのが、（α）平叙文の強調形で、全体の 40%を占

め、どの場面においても使用された。（β）語末高がもっとも使用されたのは、「心配している」場面であり、次いで「存在確認」場面であった。「責める」「葬式」の場面では、（β）語末高は一度も使用されなかった。（γ）語末下降がもっとも使用されたのは「お願いをする」場面であり、次いで「葬式」場面であった。

以上のことから、存在確認や心配など、疑問の意味合いを含む呼びかけをする際には、語末高が使用され、語末下降はほとんど使用されない。また、非難など呼びかける相手に対する否定的な感情を表現する際、または悲しみの感情を表現する際には、語末下降が使用され、語末高が使用されることはない。語末下降は、また、お願いをするときや、久しぶりに会った時など、呼びかける相手に親しみを表す場面でもよく使用される。つまり、語末下降は感情を表現する際によく用いられることがわかる。

（７）場面ごとのイントネーション型の出現回数

	α平叙文の強調形	β語末高	γ語末下降	計
1 注意を引く	18(45%)	13(33%)	9(23%)	40
2 責める	24(60%)	0	16(40%)	40
3 存在確認	10(25%)	27(68%)	3(8%)	40
4 葬式	19(48%)	0	21(53%)	40
5 遠くにいる	14(35%)	12(30%)	14(35%)	40
6 目の前にいる	25(64%)	4(10%)	10(26%)	39
7 久しぶりに会った	20(50%)	3(8%)	17(43%)	40
8 心配している	5(13%)	34(85%)	1(3%)	40
9 お願いをする	8(20%)	8(20%)	24(60%)	40
計	139(40%)	102(28%)	118(32%)	359

ただし、アクセント型別に見ると、起伏型ではα型の出現率が最も高く（５１％）、γ型が最も低い（１９％）が、平板型では、α型とγ型の出現率が逆転し、γ型が５２％、α型が２２％となる。平板型でγ型がよく使用されるのは、「責める」「葬式」「久しぶりに会った」「お願いをする」場面で、いずれも８０％以上の出現率となっている。これは、例えば葬式の場面等では、下降を行わないことが不適切であると考えられているからではないかと推察される。同じ場面でも、語彙アクセントにより音調の下降が実現される起伏型ではα型で代用可能となる。

まとめると、語末の高音調は疑問の意味合いを付加するために用いられ、語末の下降は強い感情を表すのに用いられる傾向がある。

４．３　語彙アクセントの中和

いずれの型においても起伏型と平板型の対立は保持され、アクセントの中和は起こらない。ただし、起伏型で語末音節内にアクセントがある語彙において、語末高の呼びかけイントネーション（β型）が実現されると、アクセントが消失する現象が見られた。

（８）起伏型アクセントの中和の例

	平叙文	呼びかけ文（β型）
起伏型	セ[ンセ]イ。	[センセイ！
平板型	オ[バチャン。	[オバチャン！

４．４　疑問文との異同

呼びかけイントネーションの３つの型のうち、疑問文と類似したイントネーションとなるのは語末高（β型）である。語末高の呼びかけは、疑問の意味合いを含む場面で使用されることが多く、疑問文との区別がつかないケースも多くみられた。

ただし、ピッチ上昇のタイミングを見ると、疑問文では、最終音節の後半から文末にかけて大きなピッチの上昇が見られる傾向があるが、呼びかけ時には、最終音節全体または、その前の音節からピッチが上昇するケースが見られた。呼びかけの場合には、呼びかけの場面に応じて、その効果（遠くにいる人に気づいてもらう等）を強調するために、イントネーションによるピッチの変動がやや広い範囲で起こりうるということが推察される。

５．まとめ

東京方言における呼びかけイントネーションでは、（α）平叙文の強調形、（β）語末高、（γ）語末下降の３つの基本型が観察され、一部の語彙を除いて、語彙的アクセントが中和することはない。場面ごとの汎用性がもっとも高いのは、平叙文の強調形であり、語末高は疑問の意味合いを含む場面、語末下降は呼びかける相手への感情を表現する場面においてよく使用された。

疑問文と呼びかけ文では、（β）語末高との類似が確認されたが、ピッチの上昇するタイミングには違いも見られた。

今後は、サンプル数を増やし、統計的な分析を行う必要がある。同時に、個人差についても把握する必要もある。また、モーラ数や文節構造による違いも確認すべき課題である。最終的には、平叙文、疑問文、呼びかけ文のイントネーションの観察から、語彙的アクセントとイントネーションの相互関係について明らかにすることを目指す。

参考文献：

Boersma, Paul and Weenink, David. (2018) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.0.43, retrieved 23 April 2018 from http://www.praat.org/

Kubozono, Haruo. (2018) Post-lexical tonal neutralizations in Kagoshima Japanese. In H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization.* 27-57. Berlin : Mouton de Gruyter.

NHK 連続テレビ小説　半分、青い。公式サイト　あらすじ https://www.nhk.or.jp/hanbunaoi/story/week_26.html